

私はソーシャルワーカー

松尾 加奈

先日、フィジー諸島共和国の首都スバから3年ぶりに帰国した。

「常夏の島」、「南太平洋の珊瑚礁に囲まれた美しい島」、フィジー。美しい珊瑚や白く広がるビーチ、フレンドリーなフィジー人の弾ける笑顔の写真で、世界中の人々にリゾート地としてフィジーは愛されている。人口は約80万人、四国よりやや大きいビチレブ島を中心に50以上の島々で構成されているこの国に対して多くの人々が思い描く「リゾート地」の顔は、ビチレブ島西部にある国際空港のある町「ナンディ」を中心としたママヌザ諸島、ヤサワ諸島の島々である。実は国の機能が集中する首都スバは、ナンディ国際空港から陸路4時間ほど走ったビチレブ島東部に位置しており、気候も風景もナンディのそれとは全く異なっている。一日のうちに天気がめまぐるしく変わり、灰色の雲の下で湿度の高く雨がちな日々が続くのが、首都「スバ」である。

フィジーの人口はフィジー人とイギリス植民地時代に連れてこられたインド人たちが拮抗しており、1970年の独立以降インド人とフィジー人の政局争いで3度のクーデターがあった。2006年12月のクーデター以降、現在でも軍事政権下にあるが生活している人々の顔には緊迫感はなく、軍事政権の支持率が約40%という数字が、「今日さえ、今さえ良ければ何とかなるさ」という国民性をよく表している。

オーストラリアやニュージーランドを「兄」、旧宗主国であるイギリスを「父」、日本やEU、国連、中国、アメリカ、韓国、台湾を「叔父」と称してこんなジョークがある。

「フィジーは弟の取り分を兄に主張し兄弟喧嘩を繰り返し、父親のスネをかじり、たまに来た叔父が気前よくくれるお小遣いをもらっているようなものだ。」

オーストラリアやニュージーランドは別として南太平洋の他の島国に比べて農業・工業・商業面で豊かな資源を持つフィジーは、それでも各国の多額の援助を受けなければ経済が成り立たない開発途上国なのだ。私は2007年3月から2010年3月までの3年間、夫の大使館勤務に伴い、このスバで生活するという機会に恵まれた。それまで社会福祉士の資格もないままに社会福祉援助技術演習の講師や実習巡回指導や東京都世田谷区の保健福祉サービス苦情審査会の専門調査員の仕事をしていたが、全てにひとつの区切りをつけてフィジーで生活を始めることになった。それでも「フィジーの社会福祉の現場を見たい。ソーシャルワーカーに会いたい。」との気持ちは抑えられず、いくつかの社会福祉の施設や団体を見学させて頂いた。

2007年9月にフィジー社会サービス協会（FCOSS）が主催した HIV 感染防止のためのコミュニティワーカー養成セッション最終日に参加した。このセッションにはフィジー各地から教師、教会員、看護師、村の青年団活動員等10人ほどが集まっていた。

日本でも HIV/AIDS 予防のプログラムは様々な形で実施されているが、他の島嶼国同様フィジーの現状がより深刻である。

「ここからそう離れていない小さな村での話です。あるカップルがそれぞれ HIV ポジティブということが判明したが、男性はナウソリ(首都スバから一時間ほど離れた空港のある町)に引越していきました。彼はそこで知り合った女性を妊娠させ、さらにその女性と別れた後でバヌアレブ島(2番目に大きい島)に渡り、ランバサ(ランバサの中心タウン)で知り合った十代の女の子にも感染させてしまった。

ところがそれだけではなかったのです。道隔てた隣の家のカップルも HIV ポジティブだったのです。男性と別れた女性が、腹いせに毎晩パーティをしていたため近隣に感染者を作ってしまったのです。このうち、あるカップルは女性が先に亡くなりました。パートナーの男性はラウトカ(ビチレブ島の第二都市)で働いており、女性の死因を知りませんでした。後に別の女性と結婚し、生まれた子供が感染していることが検診でわかり、初めて自分も感染していたということを知ったのです。」

もともとセックスに対する意識が日本とは違う上に、貧困・失業、未就学という問題を抱え、さらに医療機関が圧倒的に足りないという現実が、HIV キャリアをますます増やしている現実。人口が少ないために、HIV/AIDS が「ジェノサイド(大量虐殺)」になりかねないという危機感が、参加者からも講師を務めた NGO 団体「FJN+」のドクターからもヒシヒシと伝わってくる。

モーニングティやランチでは、みんな日本の事情を知りたがって話しかけてきてくれたが、中でも最初に話しかけてくれたやさしい目をした男の子がいた。彼はスバの NGO で働いているという。一足先に帰った彼は、「HIV ポジティブ」だった。

2007年10月、HIV/AIDS 予防の活動をしている政府職員、NGO、そして太平洋州の途上国開発支援をしている国際機関 SPC(Secretariat of the Pacific Community)のメンバーによるワークショップにも参加してみた。先のセッションが、よりコミュニティを意識しているのに対し、こちらはもっと大きなフレームでの広報活動を展開している人々を対象としている。テーマは、人々の行動変化を効果的に支援し、さらにその変化を持続させていくためのコミュニケーションスキルを磨くというもの。「行動変容のためのコミュニケーション」という HIV/AIDS 予防活動でよく目にするテーマである。この中で「私はソーシャルワーカーだ」と自己紹介した NGO のメンバーがいた。大きな身体とげんこつのような手を持つチョネは、「専門教育は受けていない。もともとは車の修理をしていたんだ。だけど社会のために働かないかって誘われて、ソーシャルワーカーの仕事をするようになったんだ。大学で社会福祉を勉強してないけど、社会のために働いてるんだから『ソーシャルワーカー』だろ？資格？それはこのワークショップの『サーティフィケーション(参加証)』さ。」

チヨネだけではない。教会主体の女性支援団体「ソングソング・バカラマラ」の会員も、2008年10月に訪れた高齢者施設「オールド・ピープルズ・ハウス」の職員も、障害者就労支援施設「ヴォケイショナル・センター」の職員も、私がフィジーで出会った社会福祉現場で働く人々のほとんどは、社会福祉の専門教育を受けていない、ボランティアとして社会に奉仕する「ソーシャルワーカー」だった。

私がソーシャルワーカー協会に入会したのは1995年、すでに15年が過ぎた。この15年の間に介護保険法が施行され、社会福祉士有資格者も格段に増え、新たな福祉専門職のシステムが構築され、国民の福祉職に対する認知度や期待度は高まってきた。今や日本で「ソーシャルワーカー」というと、「福祉専門職で有資格者」を指している。資格もなく、仕事を離れて家庭に入ってしまった今の私は「私はソーシャルワーカー」だとは言えない。フィジーで出会った人々が屈託なく「社会のため、ニーズのある人のために働いてればソーシャルワーカーだ」と言いきれるほど、日本は単純ではなくなっているのだ。しかもソーシャルワーカーに求められる資質は年々水準が高くなっており、並大抵の努力で「ソーシャルワーカー」になることはできない。

日本に帰国した私が最初にしたこと。それは、社会福祉士受験資格を取るために通信教育課程への入学である。フィジーにいた3年間で、今更ながら自分の居場所は社会福祉の場にしかないということが判ったのだ。まずは日本のソーシャルワーカー達と同じ土俵に立ち、もう一度、今度は自分の力でフィジーに戻ってみたい。「私はソーシャルワーカーです」と胸を張って、仕事をしてみたい。夢と妄想が広がるばかりである。

